

大果系いちご新品種「栃木i27号」の育成

1. 試験のねらい

栃木県の主力品種である「とちおとめ」は業務用から生食用、加工用まで幅広い用途に利用されてきたが、年内の稀少期を除き高級生果用としての引き合いが弱い傾向にある。そのため高級ブランド等の新たな需要喚起につながる品種の育成が望まれている。そこで、促成栽培に向き、大果で外観および果実品質に優れ多収である新品種を開発する。

2. 育成経過

平成17年度に大果で外観に優れる「00-24-1」を母親とし、食味が良く炭疽病に強い「栃木20号」を父親として交配し、得られた実生の中から平成18年に「06-36-1」を選抜した。平成21年に特性検定試験を行い、外観品質、収量性が優れ、炭疽病および萎黄病に対する耐病性が認められたため、系統名「栃木27号」を付した。平成22年から2か年にわたって現地適応性を検討した結果、「とちおとめ」に比べて、極めて大果で外観品質が優れ、収量性が高く食味も同等に良いなど優れた特性を有することが実証されたため、平成23年11月に品種登録を申請し、平成24年2月20日に「栃木i27号」として出願公表された。

3. 特性の概要

- (1) 草姿は立性で生育はかなり旺盛である。開花及び収穫始期は「とちおとめ」と同程度かやや早い。頂花房の着花数はかなり少なく5～8花程度である。収量性が高く、収穫前期までの段階でも「とちおとめ」より多収である。大果の発生率が高く、果重比で7割以上が22g（3L）以上となる。一果重は極めて大きく、可販果数（着果数）が少ないので収穫・調整作業が省力となる（表-1）。
- (2) 果形は円錐形、果色は濃橙赤で、果肉色はやや淡い。光沢は良く外観は優れる。糖度、酸度はやや低いバランスが良いため、食味は「とちおとめ」と同等によい。果実硬度は「とちおとめ」よりやや高い（表-2）。
- (3) 「とちおとめ」に比べて、炭疽病および萎黄病に対する耐病性は高い（データ省略）。

4. 栽培上の留意点

- (1) ランナーの発生は、初期の発生が少ないものの後半増加し、最終的には「とちおとめ」と同程度の発生数となる。
- (2) 頂花房の着花数が少ないので、夜冷等の早い作型では頂花房と1次腋花房間の収穫の谷間が大きくなりやすい。
- (3) 厳寒期でも草勢は旺盛であり、電照等は必要としない。
- (4) 炭疽病、萎黄病とも高度抵抗性ではないため、基本的な防除は必要である。
- (5) 定植後の草勢が強すぎると果実の先端部分がマダラとなる着色不良果が発生する可能性がある。また厳寒期にヘタ元がマダラとなる着色不良果が発生しやすい。

5. 成果の要約

「とちおとめ」に比べ極めて大果で収量性が高く、果実外観も優れ、炭疽病および萎黄病にも耐病性を有する「栃木i27号」を育成した。

（担当者 いちご研究所 開発研究室 重野 貴、小林泰弘）

表－1 生育および収量

品種名	開花日 (月/日)	収穫始期 (月/日)	頂花房 着花数	月別収量 (g/株)						合計	収量比
				11月	12月	1月	2月	3月	4月		
栃木i27号	10/23	11/29	7.9	38	150	250	168	168	111	887	126
とちおとめ	10/27	12/2	24.0	7	132	177	87	148	153	703	100

品種名	年内収量(g/株)		前期収量(g/株)		階級別収量 (果重g/株)				
	11~12月	収量比	11~2月	収量比	>30g	22~30g	11~22g	7~11g	7g>
栃木i27号	188	135	606	150	469 (52)	218 (24)	188 (21)	19 (2)	5 (1)
とちおとめ	139	100	403	100	123 (16)	153 (20)	308 (41)	119 (16)	51 (7)

系統・品種	可販果数 (個/株)	可販果率 (果数:%)	可販果1果重 (g)	乱形果率 (%)	不受精果率 (%)
栃木i27号	33.3	96.8	26.6	23.7	2.3
とちおとめ	42.4	78.4	16.6	22.9	5.1

7/14採苗、9/15定植のポット作型

表－2 果実特性

品種名	果形	果色	光沢	糖度 (Brix)	酸度 (%)	糖酸 比	食味	硬度 (g/φ2mm)
栃木i27号	円錐	濃橙赤	良	9.2	0.64	14.3	良	78
とちおとめ	円錐	鮮赤	良	10.2	0.72	14.2	良	70



「栃木i27号」着果状況



「栃木i27号」果実外観